

<全体分析>

試験時間 60分

解答形式

語句選択 33問 記述 23問 短文記述 1問 論述 2問(80字、80字) 計 59問

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

大問数5題は昨年度と同じであったが、小問数は60問から59問に減少した。論述の字数が合計180字から160字に減ったが、字数制限のない短文記述が1問加わったので、負担が軽くなったとは言えず、試験時間60分は余裕があるとは言えない。

出題の特徴や昨年との変更点

例年通り、I・IIが語句選択、IIIが空欄補充の記述、IV・Vが史料を素材とする記述・論述の問題。史料を踏まえて解答を作成する論述問題や、正解となる語句が語群にない場合に「0」と答える形式は文学部特有である。

その他トピックス

短文記述が出題された。

従来の文学部は前近代を中心に出题されていたが、2年連続で1980年代以降が出题された。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	語句選択	原始・古代の遺物と遺跡／古代の城柵	空欄Aの正解は8(ナイフ形石器)としたが、尖頭器を正解と考えて0を解答した受験生もいただろう。空欄Dは7と9で判断を迷っただろう。	やや易
II	語句選択	古代～近代の教育と学問	教育と学問という頻出テーマであり、設問も基本的なもののばかりなので、完答をめざしたい。	易
III	記述	江戸幕府の職制	Cの「(板倉)勝重」は難。Gの「公事(方)」は過去にも出題歴があり、慶應義塾大学志望者ならば正解したい。	標準
IV	記述 短文記述 論述	北条義時と得宗家 《史料》	3本の未見史料を素材とした問題だが、昨年度と同様に史料の読み取りと設問文を手がかりに解いていく誘導型の問題で、時間をかけて解く必要があった。問1・8は差がついたと思われるが、慶應義塾大学志望者ならば正解したい。問10は、史料3本を読み込んだ上でこれを踏まえて解答する必要があることと、80字以内に簡潔にまとめるのが難しかったかもしれない。	標準
V	記述 論述	経済大国日本と国際 経済 《史料》	問3・問5は慶應義塾大学志望者ならば正解したい。問4はやや難。問7は難。問8はバブル経済発生のしくみを説明する問題なので、難度は高くないが、80字以内にまとめるのに苦労しただろう。	難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

教科書の内容をマスターするとともに、実戦力をつけるために過去問に取り組むことが重要である。それにより、出題の難度を把握するだけでなく、適当な語句がない場合に「0」を選ばせる文学部特有の出題形式に慣れることができる。さらに、IV・Vで出題される論述問題に対しては、日頃から実際に解答を作成する訓練などを積み、苦手意識をなくしておくことも合格の必須条件となるであろう。歴史総合を意識してか、2年連続で大問1題現代史が出題された。新課程に向けて、近現代史は深く、かつ世界史的な視点を持ちながら学習に臨んでほしい。